

とある金曜日の女子歓 談(ガールズトーク)

adlib

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

とある金曜日、四人の少女が交差するとき、物語は始まる。

目次

とある月曜日の佐天涙子	1
とある火曜日の初春飾利	7
とある水曜日の御坂美琴	15
とある木曜日の白井黒子	21
とある金曜日の女子歓談	32
とある水曜日の禁書目録	35

とある月曜日の佐天涙子

とある月曜日の朝、佐天涙子の目覚めの気分は最悪だった。

かつて佐天は、無能力者（レベル0）であることにコンプレックスを抱き、幻想御手（レベルアップ）という禁じられた手段に手を出した。そして結果は、楽をして簡単に特別な力を手に入れられる程世の中甘くはないというワリと当たり前の事を再認識した事と、大事な友達を悲しませるようなことは二度としないという誓いを立てた事だった。今でも幻想御手（レベルアップ）の件や無能力者（レベル0）であることが全く気にならないと言えば嘘になるが、それに囚われて生き続ける程、もう佐天涙子は弱くはないはずであった。

しかし今朝の夢は、あの頃の自分、無能力者（レベル0）であることにコンプレックスを抱き、幻想御手（レベルアップ）という禁じられた手段に手を延ばしてしまった、弱い自分を思い出させる夢だった。それも、能力を持った人間は友人ですら疎ましく思えた時の気持ちがありありと甦る夢だった。

佐天は、あの頃の自分を後悔し、そして、吹っ切れたつもりでいて実際はこんなにも引きずってしまっている弱い自分が惨めで恥ずかしかった。沈んだ気持ちを何とか変

えようと、現実をしつかりと認識する為に机の中にある検査結果（システムスキャン）の通知書を取り出して見たが、そこに書かれた「LEVEL 0」の文字を見ても気持ちは沈むばかりで上向くことはなかった。

今の気分で初春と顔をあわせたくない佐天は、学校でも極力初春を避け、授業が終わると同時に「今日ちよつと用があるから」と言つて逃げるように学校を出た。

佐天は一刻も早く学校から遠ざかろうとしたが、気がつくとなを向いて溜息をついてしまつていた。そしてそれを何度も繰り返し返していたところ、道端で人にぶつかつてしまい、鞆を落として中身をブチ撒けてしまつた。

「ごっ、ごめんなさい……」

ぶつかつた相手は、半袖の白いYシャツの、見た目と制服からして高校生くらいの少年だった。

「ああ、俺は大丈夫。そっちは大丈夫か？」

そう言いながら少年は、ぶつかつた拍子に佐天が落として散らばつてしまつた鞆の中身を集めていた。

「あつ、どつ、どうも……」

自分の不注意でぶつかつてしまった上に散らかした鞆の中身を相手に拾われているという状況が居た堪れない佐天は、恥ずかしさから逃げるようにすぐ鞆の中身を拾い始

めた。

少しして、少年が呟いた。

「ん、コレは……？」

手にした紙には、「LEVEL 0」と書かれていた。

少年の呟きを聞いてそちらを見た佐天は、彼が手にしている物が、今朝机から取り出して鞆に入れたままになっていた検査結果（システムスキャン）の通知書であると理解した瞬間、「あっ！」と声を上げ、半ば反射的に少年の持つ通知書に手を伸ばした。そして、通知書の端を掴んだ途端、再び「あっ！」と声を上げて今度は通知書から手を放した。

「す、すいません……」

と呟き、佐天は下を向いてしまった。

佐天涙子は恥ずかしかった。他人に、道端で不注意にぶつかり、さらに散らかしてしまった鞆の中身を拾ってもらい、その上突飛な行動を見られ、しかも無能力者（レベル0）と知られてしまった。しかし何より、無能力者（レベル0）と知られるのを怖れて通知書を隠そうとしてしまった自分自身が恥ずかしかった。

佐天の様子を見ていた少年は、やがて無言で他の散らばった荷物を集めると、通知書と一緒にやや雑に鞆の中に押し込め、佐天に差し出した。

「す、すいません……」

鞆を受け取り、先程と同じ言葉を口にして先程と同じように下を向いた佐天を見て、少年は少し間をおいて考え込んだ後、覚悟を決めたような顔をして口を開いた。

「俺も無能力者（レベル0）だけど、それで「恥ずかしい」とか「能力者の方が偉い」なんてことは思わない」

「えっ?」

急に話し出した少年に佐天は驚いたが、少年は気にせず続ける。

「たとえ凄い能力持ってて、この学園都市の中では凄く貴重な人材だったとしても、その能力を振りかざして人様に迷惑をかけるようなヤツがいるなら、そいつは無能力者（レベル0）以下の最低なヤツだ」

そう言った少年の脳裏に、ふと、何かと因縁をつけて自分に電撃を放ってくるような少女の顔が浮かんだ。少年は、とある少女とその妹達のことを思い、苦い顔で少し黙って考え込んだ後、続けた。

「それに、能力があるヤツはあるヤツで、皆が知らない色んな努力をしているかもしれないし、能力があるばつかりに苦しむことだってあるかもしれない。だから、能力さえあればいいとか、無ければとにかくダメなんてことはないんだ」

佐天は固まっていた。動揺していたところにいきなり、それも見ず知らずの人から熱

い説教を受けては、どう対処してよいかもわからずただ少年の言葉を受け止めるしかなかった。

「これまでの自分に囚われて、無能力者（レベル0）であることを気にして下を向いていても、何も変わらないし、何も克服できないし、何も始まらない。それよりも、これからの自分がどうするべきか、どうありたいのか考えるんだ。今すぐ変わるなんてことはないし、今すぐ無能力者（レベル0）であることを克服するのは難しいかもしれないけど、それでも、今の自分が未来の自分の為に来ることを考え、そして積み重ねていくんだ。そうやって前を向いて生きていけば、きつと何かが変わる日が来る、自分を受け入れられる日が来る、何があっても揺らがない自分を持つことが出来るって、そう信じるんだ」

佐天は、少年が何故いきなりこんなにも力の籠った熱弁をふるっているのか理解出来なかった。しかし、目の前の人が、ほんの数分前に出会った見知らぬ人間を励ます為に頑張っている事は理解できた。

普通なら、悪意ゼロなのは判るが正直ちよつと引くところだが、心が冷え込んでいた今の佐天の心には、少年の熱弁はむしろ丁度良い暖かさで響いた。少年の真剣な言葉と姿は、佐天涙子の心の底にあった重りのような感情を、まるで最初から存在していなかった幻想のように消し去っていた。

「じゃ。気をつけてな」

「あつ、あのつ、ありがとうございました！」

頭を下げた佐天に対し、片手を挙げてひらひらさせながら、少年は人ごみに消えていった。

少年が見えなくなった後、佐天は急に初春飾利に会いたくなくなった。今朝からずっと避けていた親友に、今の自分で向き合いたくなくなった。

佐天涙子は慣れた手つきで、初春飾利の携帯番号に電話をかける。

「あ、初春？　ウチだけど、実は暇になっちゃったんだ。で、この後なんだけど……」

とある火曜日の初春飾利

とある火曜日の夕方、初春飾利は風紀委員（ジャツジメント）の仕事を終えて帰宅の途についていた。

先週から細かい事件が増え、書類作成等の雑務も増えたため、最近の初春はお疲れ気味であった。昨日など、学校で親友の佐天涙子の様子が何となくおかしかったにも関わらず、放課後彼女を気遣うよりも風紀委員（ジャツジメント）の仕事を優先しなければならぬほどであった。幸い佐天は、昨日の放課後には遊びの誘いをくれていたので心配するようなことはなさそうだが、そんな佐天の誘いを仕事を理由に断ってしまった後悔もまた、初春の疲れの原因の一つであった。

「お仕事だから仕方ない、なんて言いたくないですけどね……」

初春は、大きく息を吐き出し、下を向きながら思わずボヤいてしまう。自ら望んで風紀委員（ジャツジメント）になったとは言え、忙しさや疲れが溜まってくればつい不満が口から出てしまう。人間、「望んだ環境ならば常にモチベーション100%」とは行かないのが普通であるが、根が真面目な初春は、「自ら希望してなった風紀委員（ジャツジメント）」の活動を、「仕事だから仕方なくやっている」と感じる部分がある自分自身に

も憤りを覚えてしまっていた。

そして、そんな悩める初春を嘲笑うかのように、近くの郊外団地の方から爆音が響いた。

初春が急いで音のした方に向かったところ、能力者同士の戦いとみられる光景が見えた。

「とっ、とにかく、まずは誰かに連絡をしないとっ！」

初春は急いで携帯電話を取り出し、友人で風紀委員（ジャツジメント）の先輩の白井黒子に連絡を取ろうとしたが、生憎電波の届かない場所にいるようで、電話が繋がらなかった。仕方が無いので次に、同じく風紀委員（ジャツジメント）の先輩の固法美偉に連絡を取った。

初春からの報告を受けた固法美偉は、すぐに警備員（アンチスキル）に連絡を取って応援を向かわせる旨、それまで戦闘能力の無い初春自身は直接戦いに関与しない旨、付近に一般人がいる場合はすぐに遠くに避難するよう指示を出す旨を伝えた。

初春は、現場の近くに団地があるので一般人が巻き込まれる可能性が極めて高いと判断し、一般人の非難指示を行うために急いで現場に向かった。決して足は速くない（というかそもそも運動神経が悪い）初春は、途中何度か転びそうになりながら、それでも必死で走った。

初春が現場近くに着くと、辺りの地面に水溜りが出来、周囲の木々や地面が一部焼け焦げ、一部は氷結していた。どうやら、炎を出す能力者と、氷を出す能力者のいざこざの様相だった。

するとすぐ近くで、先ほどと同じような爆音が起こり、初春の耳に襲い掛かった。慌ててそちらを見ると、炎と氷がぶつかり合って爆音と共に辺りに大量の水蒸気が発生していた。

初春は、戦いに巻き込まれないように注意しながら、周囲に逃げ遅れた人がいないか探した。すると運悪く二人の近くに、恐怖で固まってしまったであろう、座り込んで動けないでいる幼い女の子がいた。

「いけない、早く助けないとー！」

初春がそう思った時、能力者の放った氷が近くにあったベンチを吹き飛ばし、動けないでいる少女目がけて飛んでいった。

「危ないっ!？」

初春はすぐに足を踏み出そうとしたが、初春のすぐ横から誰かが初春より早く少女に向かって飛び出し、間一髪のところまで少女を抱えてベンチをかわした。

「だっ、大丈夫ですか!？」

初春は慌てて、少女を抱きかかえてベンチから逃れた人影の元へ走り寄った。白い半

袖のYシャツを着た、見た目と制服からして高校生くらいの少年だった。少女に飛びついて転がった際、運悪く水溜りに頭が触れてしまったようで、髪の毛が濡れて頭に張り付いていた。

「俺は大丈夫だ。それより、この娘を早く安全なところまで」

そう言つて少年は、濡れた髪を気にもせず、初春に少女を預けた。いきなり少女を預けられた初春は、戸惑いつつも少女を抱きかかえた。未だ恐怖で固まって動けず浅い呼吸を繰り返す少女は、見た目以上に重たく感じられた。

少女を初春に預けた少年はやおら立ち上がり、戦っている能力者達に向かって駆け出そうとした。気づいた初春は、慌てて少年の腕を掴んだ。

「どっ、どうするんですか!？」

「決まってる!こんな人が多そうなところでアイツらにケンカを続けられたら、他の人も巻き込まれる可能性がある!アイツらをどうにかして、人の少ないところに誘導しない」と

「きつ、危険ですよ!」

「そんなこと言つてたら被害が広がっちゃう。危険でも何でも、とにかく何とかしないと!」

「もつ、もうすぐ警備員(アンチスキル)の応援が来るはずですから、それまで私たちも

避難していた方が……」

「そんなの待ってる余裕はない。このままじゃいつ誰が巻き込まれるかわからない、今すぐアイツらを少しでも遠くに誘導しないとダメだ」

初春は気圧される。どうしてこの人はこんなにも真剣に、しかも自分を危険に晒してまで、周りに被害が出ないよう行動しようとするのか。

「……もしかしてあなたは、風紀委員（ジャツジメント）ですか？ それともあの人達を止められる能力を持っているんですか？」

そう尋ねられた少年は、今まで以上に強い口調になる。

「俺は風紀委員（ジャツジメント）でも能力者でもないけど、こんな時にそんなの関係ない！」「自分は能力者じゃないから」なんて言い訳をして、助けが来てくれるのを待つただけで自分は何もしないで、助けられたはずの誰かが傷ついてしまうなんて結末、絶対に正しくない。俺はそんなの許さない！」

そう言つて少年は、初春の手を振り解いた。

「君はその娘を早く安全な場所に連れて行つてくれ！」

そう言い残して駆けて行つた少年の背中を、初春は放心したように見つめていた。

風紀委員（ジャツジメント）や警備員（アンチスキル）等の組織は、学園都市の治安維持を目的としているので、こういった場面で治安維持の為に行動するのが当然の責務

だと思う。また、白井黒子の話では、同じく初春の友人で学園都市第3位の超能力者（レベル5）である御坂美琴は時々個人的に治安を乱す心無い能力者やスキルアウトを懲らしめているらしいが（美琴的には単なるストレス解消目的が大半を占めるが初春は知らないとか知らないほうが幸せ）、それも超能力者（レベル5）の能力という後押しがあるからやれることだと初春は思う。

しかしあの少年は、風紀委員（ジャツジメント）でも能力者でもないと言う。なのに彼は、危険を冒して少女を救い、今また周囲の安全の為に危険を冒すことをさも当然のことのように言つてのけた。風紀委員（ジャツジメント）としての責務や、能力者という後押しがなくとも、ただ純粹な己の意志一つで行動を起こしたのだ。かつて白井黒子に、「己の信念に従い正しいと感じた行動をとるべし」という風紀委員（ジャツジメント）の心得を教わったことがあるが、少年は風紀委員（ジャツジメント）ではないのに、風紀委員（ジャツジメント）としての大事な信念を当たり前のこととして体現していた。初春は、少年に尊敬の念を抱いた。風紀委員（ジャツジメント）としての心得を風紀委員（ジャツジメント）では無い人間に見せつけられるのは、とても衝撃的で、眩しかった。しかも不思議と悔しさは無かった。その感動は、忙しい日々の中で見失いかけていた初春の風紀委員（ジャツジメント）としてのモチベーションを、大いに揺さぶった。初春が密かに感動している間に、少年は能力者に石を投げつけ、石が当たって2人が

少年に注意を向けると、少年は二人を力強く指差し、何事か挑発めいたことを叫んだ。そして二人の能力者は少年の挑発に乗ったようで、少年に対して攻撃を始めた。

少年は、二人に挟み撃ちを喰らわれないよう注意しつつ何とか攻撃をかわしながら、人の少ない郊外の方に向かって逃げて行つた。二人もそれを追いかけて、やがて三人は人気の少ない郊外に消えていった。

程無くして到着した警備員（アンチスキル）に少年と能力者達が消えた方向を伝えた。初春は、以後の処理を警備員（アンチスキル）が引継ぐことを確認した後、状況を固法美偉に連絡した。

連絡を終えてすぐ、先ほど到着した警備員（アンチスキル）の一人がやって来て、能力者二人は確保した旨、二人の証言から少年はとりあえずどこかに逃げ去った旨を教えられた。一安心した初春は、少年が助けた少女を近所の家まで送り届けた。

家に戻つた初春は、早速明日固法に提出する報告書の作成を始めた。自分でも面白いくらいすらすると報告書が書けた。つい数時間前は頑張つても上手く書けなかつた書類の文章がどんどん頭に浮かび、それでいて数時間前にあつた疲れはまるで感じられず、嬉しくて楽しくなつた初春は、未だ残っている風紀委員（ジャッジメント）のその他の書類も次々と書き上げた。

翌日、筆が乗りすぎて饒舌になつてしまい、固法と黒子に「無駄に長い」「もう少し報

「告書は簡潔に」と注意されてしまうことを、初春飾利はまだ知らない。

とある水曜日の御坂美琴

「ちよつと一緒に来て」

とある水曜日の午後、街中で出会うなりそう言い放つて歩き出した御坂美琴の後を上条当麻は歩いていった。どうやら、町外れに向かっているようだった。

「あらやだこんな時間から男捉まえてどこ連れて行って何するつもりなんですか常盤台のお嬢様も大胆なことしますねー」

くらしいのことを普段の当麻なら言っただけなのに、声をかけてきた美琴が元気が無いように見えたので、大人しく黙って後を追っていた。心なしか弱々しくも緊張ぎみの少女の背中を見ながら、当麻は御坂に何があつて、その原因は自分なのか、だとしたら何か出来る事はあるのかとあれこれ考えていた。

しかし、当麻が解答を見つげる前に、人気の無い廃材置き場に到着した美琴は足を止め、振り向いた。

「しつかり防御しなさいよ？　じゃないと……死ぬわよ！」

当麻がワケもわからず慌てて右手を構えると、学園都市第3位の超能力者（レベル5）、『超電磁砲（レールガン）』の御坂美琴は、上条当麻に向かって電撃を放った。

「皆さんも御坂さんのような超能力者（レベル5）を目指し、少しでも能力のレベルを上げられるよう努力して、能力者としての価値を高めて行って下さい」

教師には生徒に努力を促す以外の他意は無かったが、となりの教室の窓際で教師の声を聞いてしまった美琴の心はざわついた。

教師の言い方だと、「超能力者（レベル5）であることが価値」であり「御坂美琴という人格」自体の価値は関係無いと思われる気がするが、それは昔からよくある事なのでまあ気にしない。それよりも引つかかるのは、「能力が高い程価値がある」と言うならば、「無能力者（レベル0）には価値が無い」ということになってしまっているのではないかと思える事だった。

近頃カリキュラムの関係だから細かい測定が続き、美琴は能力を思いっきり開放する機会が無い。性格的に「我慢」は苦手だし、「思いつき」が出来ないのがストレスになっていて、普段なら気にならない事にまで心を乱されてしまう。

美琴が何となく無能力者（レベル0）の事を考えていると、自分の電撃を片腕一本で防ぐクセに自分の事を無能力者（レベル0）と言うツンツン頭の少年の顔が頭に浮かんだ途端、美琴の思考はその少年に塗り潰された。

確かにあのバカは、本人が言う通り無能力者（レベル0）であれば学園都市の科学的観点から評価すれば価値が無いかもしれないが、実際は超能力者（レベル5）の自分の

電撃を受けてもキズ一つ無いし、異能力（レベル2）だか強能力（レベル3）だかの能力をいい気になって振りかざして世間に迷惑かけているそこらのバカ連中に比べれば害は無い、それどころか無謀とも言える正義感でどんな危険な場面にも首を突っ込むお節介が過ぎる程のお人好しだし、第一あんなヤツでも（美琴の言い分的には）一応自分の知り合いなのだからその知り合いを「価値が無い」と言われるのは面白い事ではない。知り合いが悪く言われた気がして気に病む自らもかなりのお人好しである美琴は、授業中も下校中もすつきりしない気分であったが、やがて「あのバカの事を考えてもやもやしている状況」にもイライラしてきてしまった。

「だいたい、どうして私がああバカの事でイライラしなくちゃいけないのよー」

そう叫んで蹴った公園の自販機から出てきたジュースを飲んでも、美琴の気分は晴れない。ツンツン頭の少年の事が頭から離れない、意識の外に追い出すことが出来ない。学園都市第3位の超能力者（レベル5）である御坂美琴は、しかしまだ幼い中学生で、自分の感情を上手く整理することも出来ない。やがてジュースを飲み干すと、今度は次の行動をどうすればよいのか解らず焦ってしまい、何か他に意識を傾けられるものを探そうと辺りを見渡すのだが、しかし焦れば焦る程、辺りの全てが視界には入っても意識に引つかからないという悪循環に陥ってしまう。

あと三分同じ状況が続いたら酸欠で倒れてしまいそうだった美琴を救ったのは、近く

を歩いていた女学生達の嬌声だった。見ると、最近開店した、女子にすこぶる評判の良い店のクッキーを食べ歩いている様子だった。

「いよし、こういう時は食べてストレス発散しましょ。……そうね、ついでに黒子にも買っついてあげるか、うん」

自分に言い聞かせるように言っつて、美琴は店に向かった。黒子の名前を出したのは、美味しい店の御菓子なんぞ買って帰ろうものなら、黒子は「喜びと感謝の念を伝える」という名目で自分にちよつかいをかけてくるであろうから、そうなれば余計な事など忘れてしまえると無意識的に計算したからだだった。

美琴が店を探して見つけると、けっこうな列が出来ていた。仕方なく列に並び、結局四種類のケーキのセット箱を購入した。箱に描かれたムササビが、一般的な感覚ではさっておき、美琴的には可愛いので中々ご満悦。

そして寮に帰ろうと歩き出した美琴は、人ごみの中に見つけた、否、見つけてしまった。

その瞬間、美味しいと評判のケーキも、美琴的に可愛いムササビも頭から消え、美琴の脳は超電磁砲（レールガン）並みの速度で思考を巡らし、ある結論を導き出した。

そして美琴は迷い無く、上条当麻に向かって歩き出した。

「最近「思いつきり」ってのが出来なかったから、ちよつとしたガス抜きよ」

周囲の物が吹き飛んで未だ細かい火花が散る中、『幻想殺し（イマジンプレイカー）』の右手を恐る恐る降ろした上条当麻に向かい、美琴は笑顔で言った。超能力者（レベル5）の自分の力を受け止められるコイツは、やっぱりただの無能力者（レベル0）なんかじゃないと、今しがた自分自身で上条当麻が「無能力者（レベル0）＝無価値者」ではないと確認出来た事で、美琴はずっと胸に痞えていたものが晴れた。おまけに久々に力を「思いつきり」使えた開放感もあつて、清々しい気持ちになるのも当然と言えば当然だった。

しかし、ワケもわからず町外れに連れてこられていきなり電撃を食らわされた当麻にしてみればたまつたものではない。すぐに美琴に抗議をするが、上機嫌の美琴は笑って流してしまった。

しかし、それではさすがに納得のいかない当麻の煽りが次第にエスカレートしてくると、遂にやつぱりキレた美琴は、電撃を放ちながら当麻を追い掛け回した。

ある意味いつも通りの遣り取りをしているうちに、二人は街中に帰ってきた。すつかり辺りは暗くなっていた。

「一応今日のお詫びとお礼。かなり評判のお店なんだから、よく味わいなさいよ？」

美琴は鞆と一緒に事前にコインロッカーに預けていた「マーブルミッコ」のケーキセットを当麻に渡した。「別にいらぬ」と言いそうになるが、今日は御坂の好きなよう

にさせてやるのがいいだろうと思った当麻は、礼を言つてケーキセツトを受け取る。知り合いを悪く言われてイライラする美琴もお人好しだが、一般人なら確実にケシ炭になつてゐるであろう『超電磁砲（レールガン）』の御坂美琴の「思いつきり」を受け、あげく電撃を放たれながら追い掛け回されても、ケガが無いとは言え「御坂の気分が晴れたならまあいつか」で済ます当麻も相当のお人好しであつた。

そして短い挨拶をかわし、似たもの同士の二人は別れた。悩み事が一気に解決して心も体調もすつきりした美琴は、心地よい疲労感に包まれ自然と笑顔で家路についたが、そういうえば同居人の夕飯の時間をすっかり忘れていたことに気づいてしまった当麻は、いつそのまゝ帰らずに青髪ピアスのところにも逃げちやおつかないと、ワリとマジで考えていた。

とある木曜日の白井黒子

とある木曜日の夕方、白井黒子は風紀委員（ジャッジメント）のパトロールとして、タイムセール中のスーパールの近くにやって来ていた。今日はこのスーパールの月に一度の特別タイムセールで人が特に多く、万が一何かあつては一大事になると思い、担当区域より少々外れたところまで足を運んだのだった。

案の定、周囲は人でごった返していた。道端には、戦地から生還して目標を確保した者や、これから戦地に向かう形勢が悪そうな者が溢れていた。戦場（という名の店内）は、さぞや悲惨な状況であろうと見受けられた。

半ば呆れたようにスーパーを見ていた黒子の傍に、白い半袖のYシャツを着たツンツン頭の少年が店内から弾き出されたようにやって来た。

「ふう、何とか卵と牛乳とカップ麺は確保できたか……。とは言え、アイツ相手に何日持つことやら……」

そして少年は、見知った人間が傍にいることに気がついた。黒子もまた、少年が自分の知る人間であったことに気がついた。

「げ」

上条当麻と白井黒子の呻き声は、お互いに気持ち悪いほど、ぴったり重なった。

とりあえず体勢を整えた当麻は、辺りをきよろきよろ見回した。

「おい白井、御坂はいないのか？いないな？」

当麻は美琴がいきなり現れて、ケンカを売られて戦果をダメにしてしまわないように警戒する。

「お姉様はいらっしゃいませんわ。私が風紀委員（ジャッジメント）のパトロールに来ただけですの」

「そうか、大丈夫か……」

当麻が胸を撫で下ろすと、その仕草を見て、美琴が厄介者扱いされたのが気に障った黒子は、当麻に皮肉の一つでも言ってみたくなくなった。

「お姉様は、名門常盤台中学の寮にお住まいですよ？ スーパーのタイムセールに並ぶなんて、無いと思えますわ」

暗に「お姉様は貴方のような一般庶民とは違うんですの」と言われた当麻は、しかし皮肉に気がつかず、黒子の言葉を自然に受け止める。

「そっか、アイツも白井も、常盤台のお嬢様なんだよな。お嬢様はスーパーのタイムセールに並んだりしないか」

「ええ、そういうことですの」

若干拍子抜けしつつも、黒子は勝ち誇ったように言う。

「……でもアイツ、普段全然お嬢様っぽくないだろ。スカートの下に短パン履いてるし、自販機蹴つてジュースをタダ飲みしたり、コンビニで慣れた手つきで漫画雑誌立ち読みしてるの何度も見ことあるぞ。案外スーパーのタイムセールに並んでても違和感無いんじゃないか?」「こんなに安く買えたー! ラッキー!」とか言つて」

「なっ!? そつ、そんなことは……」

黒子は「ありえない」と続けようとしたが、しかし確かに、美琴の性格や行動から考えるとなながち違和感は無いかも思わないと思つてしまい、「ごめんなさいお姉様」と心の中で美琴に謝りながら、黙ってしまった。

しかし黒子としては、当麻がごく自然に美琴の本質を言い当ててしまったことは、決して面白いことではない。当麻が美琴にとつてある程度特別な存在である点についてはししぶ認めてやっているつもりであるが、黒子には美琴の一番近い存在であるという自負があるせいか、ついつい対抗意識が芽生えてしまう。

「……確かにお姉様には、常盤台中学の一般生徒に比べると若干淑やかさに欠ける面があるかもしれません。しかしそれは、お姉様が普段から飾らず自然体でいるということ。しかもお姉様は、学園都市に七名しかいない超能力者（レベル5）の力をお持ちに

なっているにも関わらず、その事で他人に対し尊大な態度を取るなど一切いたしません。ですからお姉様は、皆から、特に下級生から多大な尊敬と羨望の眼差しを集めていらつしやいます。これ即ち、お姉様が真に素晴らしいお方であるという証左であつて、お嬢様らしいかどうかなど瑣末な問題ということですよ」

話の趣旨がズレてしまつてゐることも気がつかずに、自分が知つていて相手の知りそうにない情報を出すことで「上条さんより私の方がお姉様という御人をより理解してゐますの」と自慢するあたり、早熟なようで、白井黒子もやはり中学生である。

「アイツ年下に人気あるのか。……あー、何となく分かるかもな」

「ええ。私を含め、常盤台中学でお姉様に一目置かない者など、根性のひん曲がつたごく一部の変人を除き、皆無ですよ」

美琴に憧憬を通り越した感情を抱く正真正銘の変人である白井黒子は、今度こそ勝ち誇つたように言い放つ。

「なるほどな。……でもアイツ、周りに持ち上げられると、「期待に応えなきゃ」って緊張して必要以上にお嬢様ぶつたりしてそうだな」

黒子は、またしても黙つてしまつた。確かに美琴は、下級生に「ずつと憧れていました！」などと迫られたりすると、照れて調子を乱し、いい顔をしようといふ不自然なお嬢様っぽい行動をとつてしまうことが何度かあつた。

「アイツは別に周りから特別扱いされたがっつてるところは無さそうだし、だいたい、お嬢様だろうが超能力者（レベル5）だろうが、アイツまだ中学生だろ。周りで勝手に偉い人扱いされたりしても、プレッシャーで息苦しくなっちゃうんじゃないのか」

黒子は何も言えない。当麻の言う通り美琴は、ある程度は仕方ないと割り切つてはいるものの、周囲から過度に特別扱いされるのを嫌がるフシがある。常盤台中学で自らの派閥を作ろうとしないのもその為で、気の置けない友人達との何気ない日常を好む。

と、ここで黒子は、先ほどから自分は美琴が周囲からどう見られているかを話していたが、一方の当麻はあくまで美琴本人の内面の話をしていたことに気がついた。これでは、果たしてどちらが真に御坂美琴という人間を捉えていると言えるのかと思うと、黒子は悔しくて下を向いてしまった。

「御坂が学校でどう思われているのか何となくわかったけど、白井はどうなんだ？ やっぱり超能力者（レベル5）のビリビリ能力に憧れてるのか？」

「へ？」

唐突に尋ねられ、黒子は気の抜けた返事をしてしまう。

しかし、上条当麻という（黒子が一方的に敵視している）恋敵（ライバル）にお姉様への気持ちを問われたとあつては、白井黒子としては生半可な返事は出来ない。敵を牽制する為にも、自らのありつただけの想いを明かす。

「私はお姉様を心から押し倒し……、もとい、お慕いしています」

微妙な本音が出かけたが、当麻は突っ込むと面倒になると思つて黙っている。

「ですがそれは、単にお姉様が超能力者（レベル5）であるというだけで決まてありません。超能力者（レベル5）に上り詰めるまで努力を重ねる意志の強さや、超能力者（レベル5）であることを誇りはしても自慢したりしない器の大きさも勿論です。ですが何より私がお姉様をお慕いするのは、自分の苦しみは他人に知られたがらないのに、他人の苦しみは進んで分かち合おうとする、優しすぎるお人好しだからですわ」

本人がいたら恥じらいのあまり超電磁砲（レールガン）を放たれそうな勢いで、黒子は美琴への想いの丈を述べた。

「そーだな。確かに白井の言う通り、自分が他人の為に無理するのは平気なクセに、他人が自分の為に無理するのは凄く嫌がるよなアイツ。超能力者（レベル5）つてことにとられられないで、そういうところをちゃんと見てくれる白井みたいなヤツが傍にいるのつて、御坂にとつては凄くありがたいことだろうな」

当麻は、かつて美琴が「絶対能力（レベル6）進化（シフト）計画」において妹達（シスターズ）が虐殺されることを止める為に自ら犠牲になろうとした事、それでいて当麻が関わりとうとするのを嫌がっていたことを思い出し、黒子に同意した。

しかし一方の黒子は、恋敵にのんきに褒められた屈辱も忘れて、ただ呆れていた。

ルームメイトということもあり、お姉様に一番近い存在であるという自負を持つ白井黒子とて、美琴を見る意識の中に「学園都市第3位の超能力者（レベル5）」という存在に対する畏敬の念が全く無いというわけではない。共通の友人である初春飾利や佐天涙子も、その点を全く意識していないなんてことはありえないだろう。

だが、上条当麻はさつきからそんなことを一切気にしていない。何ら意識せず自然に、ありのままの「御坂美琴という人間の本质」だけを見ている。どうしてそんなことが出来るのか、黒子には解らない。

戦果を再確認しだした当麻をぼんやり見ていた黒子は、ふと、美琴が言っていたことを思い出す。

以前から美琴は、当麻と諍いを起こした後は当麻に対する文句を言いながら妙に饒舌に（そしてその度に黒子は不機嫌に）なるのだが、その際「私の電撃が効かないって何なのよアイツ」的なことを何度か言っていた。その時は、お姉様とお戯れなさったところの類猿人に対する嫉妬にばかり気が向いていたが、よく考えてみると「上条当麻には御坂美琴の能力が通じない」ということになる。

それだけなら「上条当麻は電撃系の能力に相性の良い能力者である」とも考えられるが、さらに黒子は、以前当麻自身が言っていたことも思い出す。かつて寮の部屋に侵入した当麻を、寮監に見つからないよう『空間移動（テレポート）』で脱出させようとして

出来なかつた際、当麻は「俺の右手のせいだ」と言っていた。同じく、地下街から脱出しようとした際には「自分の右手は能力を無効化してしまふ」と言っていた。あたかも、学園都市の都市伝説に出てくる「どんな能力も効かない能力を持つ男」のように。

黒子は、詳しいことはわからないが、もし彼が「能力を無効化する能力」を持っているのなら、上条当麻にとって全ての人間は平等なのではないかと思つた。だって、どんな凄い能力を持っていても、能力が無効になつてしまえば、無能力者（レベル0）の一般人と何ら変わらない。たとえば「学園都市第3位の超能力者（レベル5）」であっても、だ。

御坂美琴という人間には、常に「学園都市第3位の超能力者（レベル5）」という地位がついてまわっている。憧れや尊敬を集めることもあるし、逆に敵を作つたりもするが、とにかくこの学園都市にいる限りそれは決して切り離せない。そしてそれは、美琴自身が望んで手に入れたものだとしても、時として自らを苦しめる重荷になることもあるだろう。

そんな美琴にとって当麻は、真の意味で対等に付き合える存在なのだ（実際には美琴は年下だが）。常に「学園都市第3位の超能力者（レベル5）」という地位を背負っている御坂美琴にとって、特別扱いが当たり前前の美琴を特別扱いしない上条当麻という人間が、如何に特別な存在であるか、黒子は痛感した。同時に、それは能力者である自分で

はいくら美琴に近づいたとしても担えない役割であることも痛感した。

複雑な感情だった。お姉様を支えているものを憎むなんてことはしたくないが、そうかと言って認めるのも悔しい。気づくと戦果である卵が一個割れていた不幸に身悶える上条当麻を、白井黒子は、上手く言葉に出来ない心境で見つめていた。

夜、美琴と黒子は机に座り、宿題をしていた。黒子が左を向くと、隣の机で宿題をする美琴が見える。何気なく宿題をする横顔でさえ、黒子にとつては凛々しさと気高さで優しさに溢れていて、眩しい。この横顔を眺める為なら、ルームメイトになる為に合法の範囲のあらゆる手段を用いたことなど全く後悔ないと思える。

そして黒子は、パトロール中に出会ったあの少年の存在が、今ここにある横顔をきくと幾度も支えてきたのだと改めて思った。昨日遅く帰宅した美琴は、前日までに比べて雰囲気は澁みのようなものがなくなっていたが、それもきつとそういうことだったのだろう。

それは、悔しくて腹立たしいことではあるが、やはり認めざるを得ないと思う。だって、お姉様が心の支えとしてしているものを否定したら、お姉様の心の在り方そのものを否定してしまうことになってしまうのだから。

「……そういえばお姉様」

それでも悔しさに耐え切れなくなった黒子は、横にいる愛しのお姉様に逃げた。

「んー、何ー?」

美琴は黒子の方を向く。正面からのお姉様の御尊顔は、今すぐ学園都市で一番高い一眼デジカメをパクって…、もとい…、持ってきて、千枚ほど激写したいくらい眩しい。

「今日風紀委員（ジャツジメント）のお仕事でちよつと足を延ばして、タイムセールのスーパーまでパトロールに行つてきましたの」

「あー、それは人が多そうねー」

「予想に違わず凄い人出でしたわ」

「そっかー。人が多いと何かあつたら大変だもんねー」

美琴は微笑んだ。

「そういうところまでちゃんと言葉で警備するなんて、流石ね黒子。偉いわ」

本人的には何気ない仕草と言葉であつたが、しかし、『超電磁砲（レールガン）』の御坂美琴の笑顔とお褒め言葉は、白井黒子の心を撃ち抜いた。そして黒子の心には、一度は消えかけた上条当麻への対抗心が再び燃え出した。

こんなにも愛しいお姉様は、やっぱり誰にも渡したくない。御坂美琴にとつて、上条当麻にしか出来ない役割があるように、白井黒子にしか出来ない役割も必ずある。その役割がある限り、自ら白旗を掲げるなんて真似は絶対にはしない。互いにお姉様を支えあい、いつかお姉様がどちらかを選ぶその時まで、決して諦めたりはしないと白井黒子は

心に誓った。

「ありがとうございます。……時にお姉様、私は外から見ただけで人の多さに辟易としてしまったのですが、お姉様はああいったところに興味はおありですか？」

「へ？ んー、そうねー……」

美琴は少し考えた後、笑顔で答えた。

「うん、面白いかもね。どんなものがあつて、どれだけ安いのかとか色々チェックしてたら、けっこう奥が深いかも」

その笑顔を見て、黒子は美琴に聞こえない小さな声で呟いた。

「……ま、今日のところは私の負けですわ」

とある金曜日の女子歓談

佐天と美琴のスーパー談義は、今度一緒に行つてみようという結論で一段落した。

「それにしても、佐天さんは凄いですねー」

初春が何気なく呟くと、佐天は不思議な顔をする。

「え、何が？」

「お料理が出来て、刺繍や着付けみたいなオシャレも出来て、その上買い物も上手なんて、女子力高いなーって思います」

「買い物上手って言われてもなあ。なるべく安く買えたら嬉しいけど、ウチは別に毎日チラシの特売品をチェックとかしてるわけじゃないよ？」

佐天は謙遜するが、美琴は初春に同意する。

「節約の意識があるってことが大事なんじゃない？」

「御坂さんの言う通りです。佐天さんが結婚したら、きっと家庭的で素敵な奥さんになれますよー」

いきなり凄い褒められ方をして、佐天は大いに照れた。

「ちよーつと。初春何言ってるのさー」

「そういう人はきつと男性にモテますよー」

初春の発言に、美琴はびくつと反応した。

以前にも、やっぱり家庭的な方がいいのかなあと思ったことのある美琴は、そういえば前にアイツが特売の卵が割れたことに酷くショックを受けていたことを思い出した。続けて、病院に見舞いに行つた際に高そうなクツキーを持つていつてやつたら「下手でも手作りの方がポイント高い」みたいなことを言つていたことも思い出した。

若干俯いた美琴は、消え入りそうな声で、搾り出すように呟いた。

「……ねえ佐天さん、やつぱり……家庭的な女の子の方が……その……男の人に……好かれるものなのかな……？」

「え……？ いや、ウチもそういう経験ないからわからないけど……」

佐天が突然振られて困惑していると、初春が意見を出した。

「男性女性関係無く、家庭的な人つて好かれることはあつても、嫌われることはまず無いんじゃないんでしょうか」

「あー、確かにそうだねー」

初春と佐天の意見を聴いた美琴は、「やつぱりそうか……」と呟くと、急に真剣な眼差しを佐天に向けた。

「佐天さん、今度スーパーの案内、宜しくつ。あとついでに、そこで買ったもので料理も

教えてもらえるかな？」

佐天は美琴の正体不明の気迫に気圧される。

「うっ、うん、わかった……。でも、御坂さんだつて別にお料理下手じゃないでしょ……？ ウチだつてわざわざ教えられるほどウデがあるワケじゃ……」

「常盤台の家政科の授業じゃ、凄く手の込んだ、宮廷料理みたいなのか教わらないのよ。もつとこう、スーパーの特売で売つてそんなもので作れる料理、そう、安く仕入れた卵を使った料理とか教えて欲しいの」

「みっ、御坂さん、何でそんなにヤル気なんですか……？」

初春も、妙に具体的な例を出して迫る美琴の正体不明の気迫にちよつと引き気味であつた。

そして、美琴が何を考えているかだいたいの予想がつく黒子は、やっぱり面白くなさそうな顔であつた。

こうして、少女達の金曜日の午後は、平和に過ぎていく。

とある水曜日の禁書目録

「それでとうまは、今まで私の事を放っておいて何してたのかわかんない?」「ちよつ、ちよつと待って下さいよインデックスさん!」これにはちゃんとした理由があるんですって!」「私が飢え死にしちゃうかもしれない事より大事な用事って何なの?」「そつ、それはちよつと詳しくは言えないんだけど……、そつ、それよりほらこれ見ろ!俺はよく知らないけど、「マーブルミッコ」って今流行っている店のケーキセットを手に入れたんだって!」

「……………」
ふーん「え、え、え!?」何そのタメが長い上に薄いリアクション!?何か嫌な予感がするんですケド!」「マーブルミッコ」なら知ってるよ。今女の子に大人気のスイーツ屋さんだって小萌が言ってた」「だから、その美味しいスイーツで御機嫌を直していただけないですかと申し上げ「そんなところにとうまが一人で自主的に行くわけないんだから、誰か女の子と、あの短髪あたりと一緒にいったってことだよね!」「いいっ!?ナ、ナンナデスカいんでつくすサンソノ超推理ハ!」「とうまは私の事放っておいてあの短髪とスイーツ屋さんに行くことが大事な用事なんだねっ!」「そつ、それは違いますって

インデックスさん!」「違うとか違わないとかどうでもいいよとにかくどうまが悪いんだよ!」「ちよつと待てお前、何で美味しい食べ物があるのに俺に向かつて捕食体制とつてるんだよ!」「自分の胸に聴いてみればいいよ!」「ノオーツ! インデックス、ノオーツ!」「どうまったら親切だね!」「脳ミソ」、つまり頭が美味しいってわざわざ教えてくれるなんて!」「誰もそんなこと言つてねえーっ!」

・2010年に書き上げたつきりになっていたものを今更投稿してみました。

・時系列的には、美琴が「圧倒的な感情」を覚える前のどこかを想定しています。一応原作小説、漫画、アニメと全部チェックしてますが、ところどころ統合性が取れていなかったり違和感がある箇所があつてもツツコミは勘弁してつかあさい。

・「ブチ撒けた」は『武装錬金』より。斗貴子さんは素晴らしいんです、ええ。

・第一話の上条さんの「これまでの自分」という言葉を「記憶を無くす前の自分」と置き換えると、またちよつと違った味わいが出るんじゃないでしょうか。

・「マーブルミッコ」は、「マーブル」は白井黒子、「ミッコ」は中の人、「ムササビ」は中の人の某反逆の忍者役から考えました。

・この話の中で黒子は度々美琴に乳ネタを振りますが、美琴さんは年齢考えると別に

そんなに貧しいとは思わないっていか学校指定の競泳水着姿なんか妙に生々しくて正直すごく微妙な気持ちになってしまうのですが、本編に登場する女性キャラの平均値から考えるとやっぱり貧しい方になっちゃうのは仕方ないのかなあと思ったり。アニメ版の佐天さんはけしからんにも程があります（しかも中一）。いいぞもつとやれ。

・「類人猿」ではなく「類猿人」、「人に近い猿」ではなく「猿に近い人」てな感じの意味で捉えて下さい。黒子の中で上条さんが、猿基点から人基点に若干昇格したという意味を込めて、勝手に造語してみました。詳しいツツコミはいらんぜよ。

・まず最初に美琴とインデックスの話を書き上げて書き上げ、その後で「全員が上条さんと絡む」という構想で他の三人の話を書くことにしました。そして上条さんの特性である「能力なんて気にしない」を主題に、前半を「レベル0なんて気にしない：理論編↓実践編」、後半を「レベル0なんて気にしない：実践編↓理論編」として構成していきます。あれ、これって上条さんの話？

・他と比べると美琴の話だけテーマ性が薄いのは、最初は全体を通したテーマとか考えていなかったからです。でも美琴の場合、上条さんに対するデレがあることが最優先事項なのは宇宙の真理なので、上条さんを意識する面を強調しているのは間違いじゃないと思います。元々書き方が固い上に全部テーマ強調でガチガチに固めるのも問題だし、そもそも美琴が好きで書いた話が出発点なので、これはこれでありだと思っていま

す。